

槇ヶ峠第2号古墳発掘調査報告

—国道314号線道路改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査—

1983

広島県教育委員会
(財)広島県埋蔵文化財調査センター

目 次

Iはじめに.....	(1)
II位置と環境.....	(2)
III調査の概要.....	(4)
IV横ヶ峰第2号古墳.....	(5)
V横ヶ峰古墓.....	(16)
VIその他の遺構と遺物.....	(22)
VIIまとめ.....	(25)

例 言

1. 本報告書は一般国道314号線道路改良事業に伴い、昭和57年4月から6月にかけて実施した横ヶ峰遺跡群の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は広島県教育委員会から委託を受け、財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 本書の執筆・編集は三枝健二が行った。
4. 出土遺物の整理・実測・整図は三枝・佐々木直彦があたり、出土遺物の写真は三枝が撮影した。
5. 本書に掲載した第1図は、国土地理院発行の50,000分の1地形図(庄原)を使用したものである。

掲 図 目 次

第1図 横ヶ峰古墳群位置図 (1 : 50,000).....	(1)
第2図 伝横ヶ峰古墳群出土遺物実測図 (1 : 3).....	(2)
第3図 市場遺跡出土遺物実測図 (1 : 3).....	(3)
第4図 横ヶ峰古墳群位置関係図及び調査区設定図.....	(5)
第5図 横ヶ峰第2号古墳墳丘実測図及び周辺造構配置図.....	(6)
第6図 横ヶ峰第2号古墳墳丘断面図 (1 : 60).....	(7)
第7図 横ヶ峰第2号古墳石室実測図.....	(9)
第8図 横ヶ峰第2号古墳出土遺物実測図 (1 : 3).....	(12)
第9図 横ヶ峰古墓墳丘実測図.....	(16)
第10図 横ヶ峰古墓墳丘断面図.....	(17)
第11図 横ヶ峰古墓列石実測図 (1 : 40)	(18)
第12図 横ヶ峰古墓主体部実測図 (1 : 40).....	(19)
第13図 横ヶ峰古墓出土五輪塔・宝鏡印塔実測図 (1 : 6).....	(20)
第14図 土塊実測図 (1 : 40).....	(23)
第15図 繩文土器実測図 (1 : 3).....	(24)

表 目 次

第1表 横ヶ峰第2号古墳出土遺物観察表.....	(13)
第2表 横ヶ峰古墓出土五輪塔・宝鏡印塔計測表.....	(21)

図 版 目 次

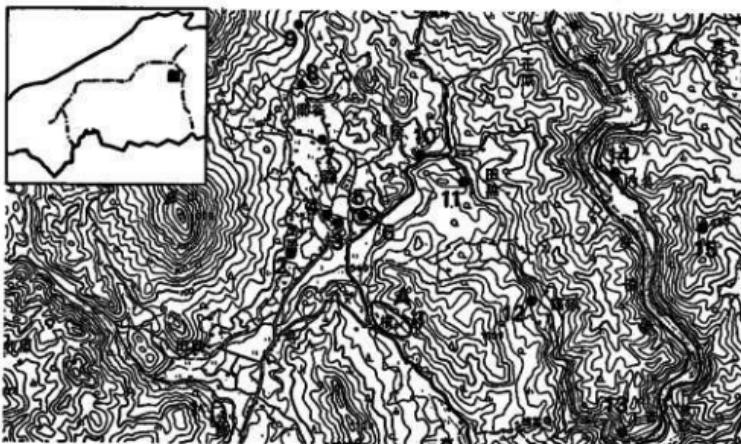
図版 1 a 横ヶ峰第2号古墳調査前近景	図版 6 上段 SK 1
b 横ヶ峰第2号古墳 墳丘検出状況	中段 SK 3
図版 2 a 第2号古墳々裾部遺物出土状況	下段 SK 4
b 第2号古墳々丘断面	図版 7 a 横ヶ峰古墓調査前近景
図版 3 a 第2号古墳石室検出状況	b 同上 墳頂部北西側五輪塔検出状況
b 同上 玄室敷石残存状況	
図版 4 a 第2号古墳石室残存状況	図版 8 a 横ヶ峰古墓基底部造構検出状況
b 同上	b 同上 主体部完掘状況
図版 5 a 第2号古墳完掘状況	図版 9 a 横ヶ峰第2号古墳出土遺物
b 同上	b 横ヶ峰古墓出土遺物

I はじめに

横ヶ崎第2号古墳、横ヶ崎古墓の調査は一般国道314号線改良工事によるものである。

当遺跡については、昭和56年6月広島県庄原土木事務所長から広島県教育委員会宛に、道路改良事業地内に於ける埋蔵文化財等の有無ならびに取扱いについての照会があり、県教育委員会では分布、試掘調査を行い、古墳2基（横ヶ崎第2、3号古墳）の存在を確認した。この取扱いについて、特に横ヶ崎第3号古墳は保存状態が良好であったため現状保存について協議したが、この改修工事はすでに古墳の直近まで行われており、現状での設計変更は困難であったことから発掘調査することとなった。昭和57年4月、土木事務所長から文化庁長官宛に発掘届を提出、同年4月19日から6月4日までの28日間にわたり当センターが調査を実施した。調査総面積は約300㎡である。

なお、調査にあたっては、広島県庄原土木事務所、東城町教育委員会、財団法人八幡会、八幡公民館、八幡中学校ならびに地元の方々から多大な御協力を受けた。関係各位に謝意を表したい。

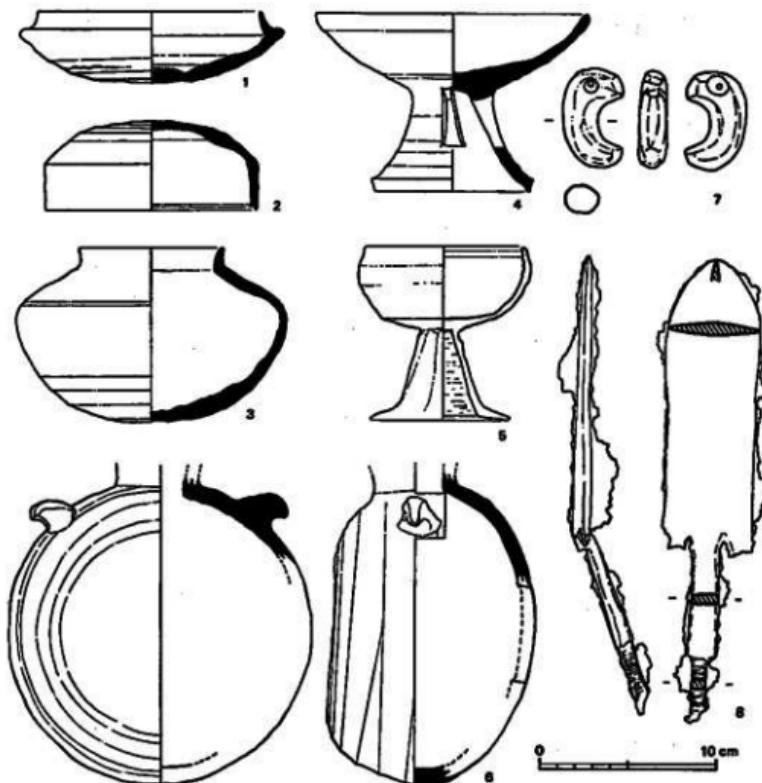


第1図 横ヶ崎古墳群位置図 (1 : 50,000)

- A. 横ヶ崎古墳群・同古墓 1. 大足山古墳群 2. 追ヶ谷遺跡 3. 市場古墳 4. 市場遺跡
5. 厳追谷古墳群 6. 厳追谷五輪塔 7. 湯谷遺跡 8. 長故古墳 9. 坊主古墳 10. 次石古墳
11. 是安山古墳 12. 嶽原古墳 13. 上善古墳 14. 川平山古墳 15. 大番蔵山古墳

I 位置と環境

根ヶ崎古墳群は広島県比婆郡東城町森字根ヶ崎の標高約550mの丘陵斜面に所在する。周辺には標高1,000mを越える道後山（標高1,269m）に連なる中国脊梁山地を背後に控え、それらの高位面に次ぐ、600m前後の中位準平原面（吉備高原）が広く展開している。また、それらの地形面は、町の南半にかけて広がる断層系および小河川などによって複雑な地形を呈している。



第2図 伝根ヶ崎古墳群出土遺物実測図（佐藤氏蔵）（1：3）

これらの複雑な地形の中にあって町内を南流する東城川は高梁川の一支流として、東城市街地の川西・川東地区を中心に、複雑に入りこんだ狭長な沖積地形を形成している。

町内の遺跡を概観すると、南半部の石灰岩地帯に展開する帝釈峡遺跡群⁽¹⁾で旧石器時代を始めとして、縄文時代の各期にわたる遺跡が知られる。次いで弥生時代になると戸宇大仙山遺跡群⁽²⁾、牛川遺跡などの墳墓が

確認されている事からも、河川流域の沖積地を生産基盤とした集落の形成が窺われる。古墳時代の遺跡分布では集落遺跡の事例こそ不鮮明ではあるが、古墳群、特に後期古墳は川東・川西および帝釈峡・三坂などの地域を中心として、樹枝状に入り込んだ小河川流域に比較的小規模な古墳群がやや散発的に展開している。

森地区的遺跡

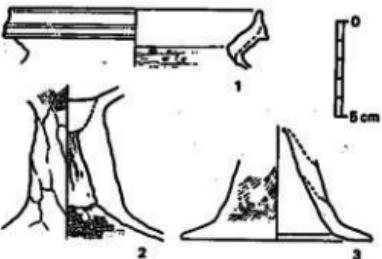
当地区は飯山東南麓に広がる盆地状地形を中心としている。この盆地状地形内には上音・下音地区で東城川に合流する小河川の分水嶺を有しており、遺跡の多くはこの地形面周辺部を中心として小河川流域にかけて分布する。中でも古墳の分布は、単独もしくは2~3基程度の小さな単位で散在的に分布する傾向といえ、多くは小規模な後期古墳である。周辺では横ヶ峠第1、2号古墳及び市場遺跡が知られている。

これらの遺跡は開墾等によって明らかになったものである。市場遺跡は弥生土器及び古墳時代後期の土器類が出土しており、二時期にわたる集落跡と考えられる。迫ヶ谷遺跡などと共にその周辺地区の古墳群の形成と深いかかわりをもつものであろう。また横ヶ峠第1号古墳からは6世紀後半の須恵器、土師器類とともに鉄刀が出土しており、第2号古墳と相前後して築かれた事が窺われる。

またこの地域は古説に「クロガネドコロ」と語られたほど砂鉄の産地であり、後世、山容がかわる程の掘削を受けているところから消滅した遺跡も多いと思われる。

注 (1) 帝釈峡遺跡発掘調査団『帝釈峡遺跡群』1976年。

(2) 広島県教育委員会「戸宇大仙山遺跡」「牛川遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2)1979年。



第3図 市場遺跡出土遺物実測図 (1:3)
八幡中学校裏

II 調査の概要

横ヶ崎古墳群は標高550m前後の丘陵裾部斜面に築かれており、從来は横ヶ崎古墓（第3号古墳）を含め3基の円墳から成る古墳群とされていた。今回そのうちの第2・3号古墳が調査対象となり、発掘の結果第3号古墳が中世古墓であることが確認され、横ヶ崎古墳群は第1、2号古墳の2基から構成されていることが明らかになった。以下順をおってその概要を述べる。

横ヶ崎第2号古墳は横ヶ崎第1号古墳から北に約80m程隔てた東西に延びる丘陵尾根の先端部に位置する。眼下には、第1号古墳同様、ほぼ南北に続く狭長な谷水田を見おろし、その比高差は約14mを測る。丘陵は大正～昭和にかけての開墾が進み、特に南側斜面は2m以上の段差をもって削平され畠地となっている。

墳丘は調査前の状況では、古墳背後の丘陵尾根部に、周溝と思われる幅広い窪みが観察されたことから、径約10m、高さ約1.5mの円墳が想定された。また石室は、南半が完全に削平され、天井石と奥壁～左側壁上半を失い、内部は底面まで搅乱が及んでいた。

調査は、墳丘の中央部を基点として、尾根中央部を通る線と、これに直交する線を、更にさきの基点から残存部墳丘を二分するかたちで、ほぼ南北方向の線を設定し、各基線に沿ってサブトレンチを設け、その壁を土層観察用畔として調査を行った。

その結果、径約10mの円墳を検出したが、石室、墳丘、周溝とも南半は既に失われていた。なお、この古墳の周辺で古墳とは直接関係しないが5基の土塚を検出した。

また横ヶ崎古墓は從来横ヶ崎第3号古墳とされていたもので、第2号古墳の北西約80mの丘陵裾部に広がる緩傾斜面に位置する。現状では墳頂の3方が畠地境となっていたため、墳形は不鮮明で、径約10m、高さ約2mの円墳が想定された。また墳頂部には3ヶ所にわたって盗掘坑がみとめられた。

調査は墳丘中央部の最高所を基点として、ほぼ東西と南北方向に基線を設けて墳丘を4区分し、その基線に沿って墳端部分から外方にかけてトレンチを設定。墳丘および主体部の検出作業に伴って、順次各トレンチを墳丘中央の基点に延長した。その結果、まず墳頂部において、表土層下面から北半部と南半部の2箇所で五輪塔と砾の散乱部分を検出した。

次いで五輪塔散乱面を掘下げ、当初予想されていた古墳主体部の検出にあたったが、主体部等の施設は検出されず、土師器、須恵器小片各1点と鉄津21点が盛土内から散見されたにとどまった。さらに、基底面まで掘下げを行った結果、墳丘中央部で集石土塙を、また墳丘西半部で列石を検出し、一辺7m余りの方形墳墓であることを確認した。

IV 横ヶ崎第2号古墳

1. 墓丘 (第5, 6図, 図版1, 2, 5)

本古墳周辺の基本的な層序は表皮層, 表土層, 黒色土層, 減移層, 吉備土となり, 更にその下には黄褐色系粘質土層が観察された。

墳丘築造面は旧表土もしくは削平面にあたる黒色土層上面に求められ, 地山整形は墳丘の造成と石室掘方の掘削に分かれる。前者はまず古墳背後にあたる部分の丘陵鞍部に, 尾根線にはほぼ直行するかたちで1~2mの幅で黄褐色土層を掘込み, これと併行して, 掘込みによる平坦部に周溝を廻らし, あらかじめ墳形を整えている。また, 周溝は上面幅1.2~2m, 溝底幅0.7~1.2m, 深さ約20cmを測り, 墳丘北側斜面付近で徐々に不明瞭となり途切れしており, 古墳背部を半周するものであったものと考えられる。

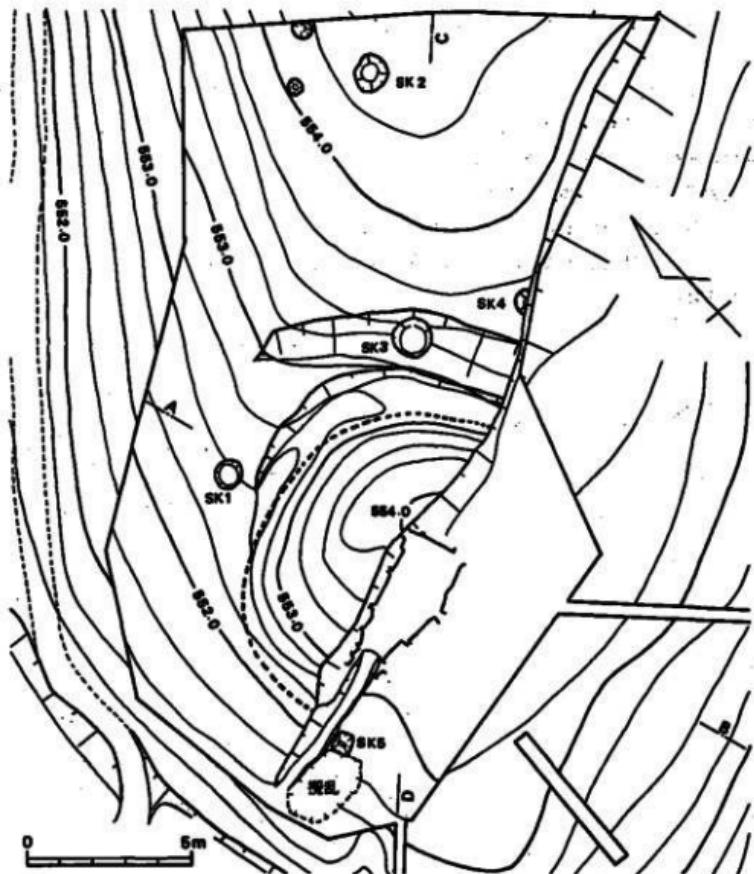
当古墳の規模は, 周溝下端内径などから推定径10mの円墳と思われ, その高さは現状では, 背部周溝底面から約1.5mを, 西側墳頂部からでは約2mを測る。このうち盛土は2層造存していた。ともに黒色土層で20~40cmの厚さをもち盛土開始面である削平面からでは約60cmの高さをもつ。



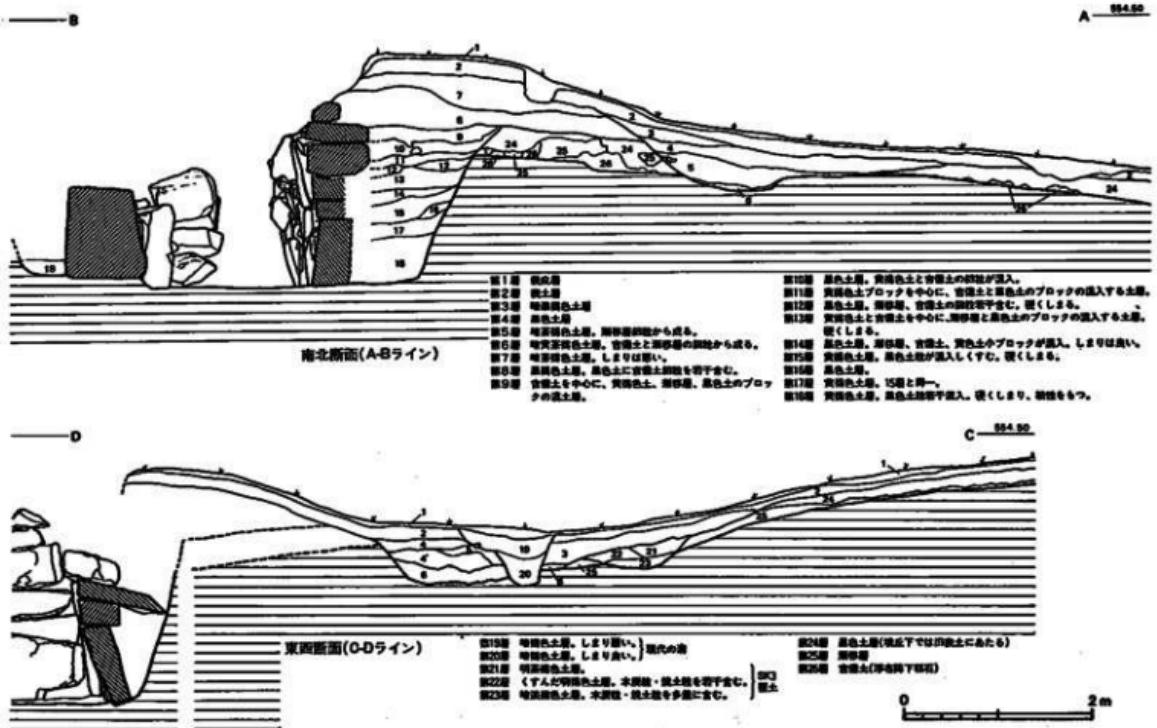
第4図 横ヶ崎古墳群位置関係図及び調査区設定図 (アミ目は調査区)

石室掘方は、墳丘下の削平面から、主軸が等高線とほぼ直交するかたちで掘り込まれている。南半部は下端からの立上りを僅かに残すのみで、現状では上面で最大長6.80m、最大幅3.05mを、底面では最大長6.40m、最大幅4.40m、深さ約1.60mを測る長橢円形を呈し、平均約70°の傾斜で黄褐色土層を掘込んでいる。

底面の状態は北半部が板ね平組に削平されているのに比べ、南半部では左側壁頭右下面に10cm前後の段をもち、二段となっている。この段は掘方北西コーナー～右側壁面開口部付近



第5図 横ヶ峰第2号古墳々丘実測図及び周辺造構配図



第6図 桜ヶ崙第2号古墳ノ丘断面図(1:60)

にかけてもみられ、地山の傾斜に対し、塙底面を一定に保ったためのものと考えられる。

裏込めの状態は、墳丘南北断面（A—B ライン）でみれば、まず腰石を据えた後、その上面まで地山掘削土を埋め、側壁の構築と裏込めを繰返しながら、天井石架構面に近い高さ（腰石から4段目）、すなわち上面で掘方上端とほぼ水平になるまで行われている。この裏込め土も、地山掘削土の黄褐色土と、旧地表削平に伴うと思われる黑色系土層を交互に良くして埋込まれていた。

2 石室（第7図、図版3、4）

石室は主軸方位をN108°Wにもつ片袖式の横穴式石室である。現存の規模は、石室全長5.20m、玄室長3.13m、羨道長2.07mとなり、玄室幅は奥壁寄りで1.74m、中央最大部1.86m、羨道との境で1.36mと、片側に強い胴張りを示す。羨道幅は玄室との境で1.15m、中央最狭部で0.78m、開口部付近で1.17mを測り、中央で内湾し開口部付近で広がる形状を呈している。右側壁開口部端で石材が崩壊し墓道にいずれ込んでいたため、羨門部の状況は不明であり、石室全長も推定で約5.50m前後あったものと考えられる。

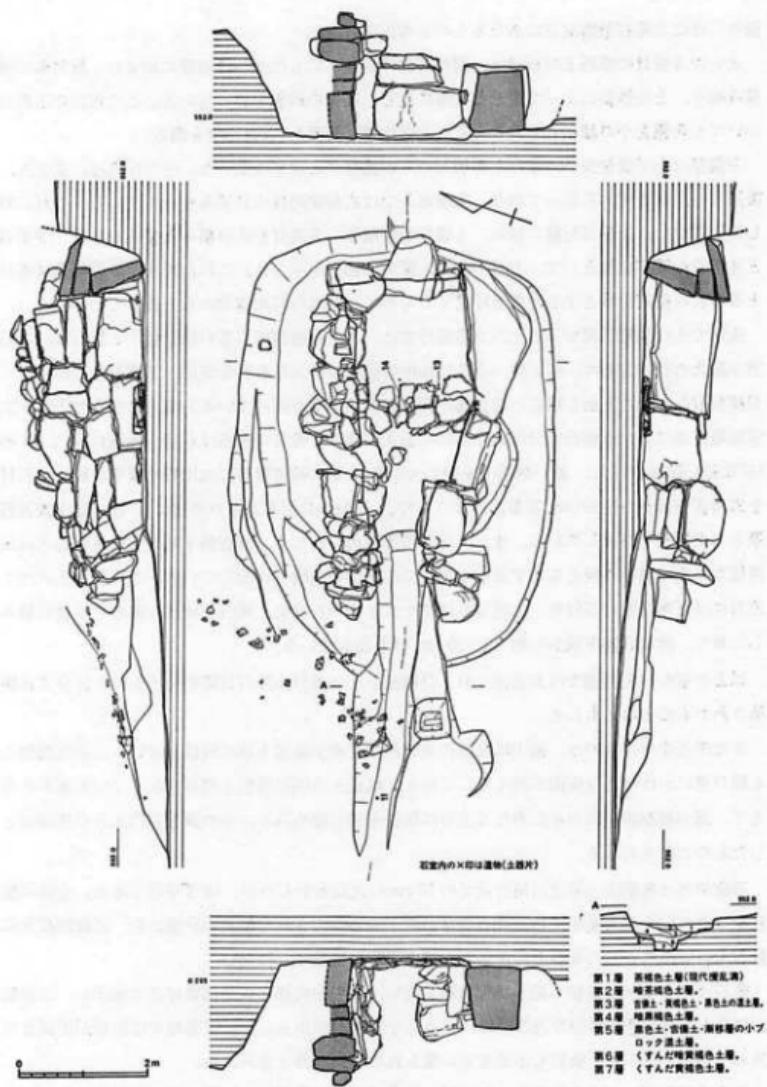
奥壁は掘方底部をわずかに掘り落め、規模の大きな2枚の板状石材を広口積みに内傾させて据えている。このうち左側壁に接する広口積み上面に、やや小規模の板状石材を横口積みし、2段目の上面を縦に据えられた奥壁上面に據えており、後者の奥壁上面には、右側壁にかけて、石室下端から約50cmせり出す様に横口積みされている。

奥壁と两侧壁の接合関係は、奥壁の一方の広口面を右側壁の側面にもたせかけているのに対し、もう一方の奥壁はその側面を左側壁腰石の広口面に接し、その間隙を板状小砾で補っており、全体として門状に構築されている。

次いで側壁の状態についてみれば、右側壁は4～6段の石積みから成り、その最上段の面は石室下端から約10～30cm内側にせり出している。

腰石の配列をみると、玄室で3、羨道で5の、計8個から成り、奥壁から3.90m付近までは、概して長軸を横長に用いて広口積みしている。その平面プランは玄室では、奥壁に接する1番目（以下何番目と略）の腰石から、羨道との境にかかる3番目の腰石にかけて、わずかに胴張り気味となり、羨道部では、ほぼ中央にあたる最狭部にかけて内湾しており、4番目の腰石を境として、羨道開口部にかけては規模の小さい石材を小口積みもしくは横口面を縦位に雜に積み、玄室部分のそれとは相異をみせている。

腰石から上への構築はやや乱雑な感をうけるが、前述の4番目の腰石部分を境として、大きく2分されよう。つまり、1番目と3番目の腰石上には板状の石材を横口積みしているのに対し、2番目と4番目の上には、腰石とほぼ同規模の石材を主に広口積みし、概ねその第1段目上面と第3段目上面で高さを揃えている。また第1番目腰石上では横口積みで4段と最も高く、第2番目の上面ではこれと高さを揃えるため、2段にわたって、他の部分では1段で、角砾を小口もしくは横口積みしている。石室床面から小口積み上面までの高さは最高で2.05mを



第7図 横ヶ崎第2号古墳石室実測図

測り、ほぼ天井石架構部分にあたるものと考えられる。

次いで4番目の腰石上の石材は、開口部側の縦積みにもたせかける様に積まれ、反対側の横積み端を、その傾斜によって生じた間隙に渡し、高さの調整を計っている。この部分の上段においても角砾を小口積みしており、その上面は墓道底面から約1.3mを測る。

左側壁は上半部を失い、ほとんど腰石のみが遺存する状態であった。その配列は、玄室2、墓道3の、計5個から成っており、玄室部分では右側壁同様広口積みをとっている。これに対し墓道部では、3番目を横口積み、4番目を縦積み、5番目を広口積みと変化をみせ、3番目と4番目の腰石を境として、石材の使用、積方に相異がみられ、これに対面する右側壁4番目と5番目の腰石を境とする変化と呼応するもので、墓道の開始部分とも一致している。

次いでその構築状況をみると、玄室部分では、まず奥壁前面に広口面を接する腰石は、本石室中最大の長さ2.40m、幅1m、高さ1.10mの規模の巨大な石材を使用、2番目もそれに次ぐ規模を有し、その上面を掘え、接合部の間隙を板状小砾で補っている。双方ともその下端を玄室幅最広部にあたる接合部分に向け斜めに据え、特に2番目の腰石は石室中軸線に対して約15°に近い開きを示し、強い調張りを呈している。更に袖部腰石には比較的扁平な板状の石材を玄室側面から約20cm 石室内へずらして、その小口面も玄室の妻壁に、横口面を墓道側壁として袖部を形成している。また、その角は直角とならず、墓道側下端を2番目腰石とほぼ同様な角度で斜めに据える事で墓道中央部にかけての内壁を作出している。この腰石上には1段目にはば同規模の石材を、2段目にはやや大きめの石材を、腰石と同様な面取りで横口積みしており、共に石室下端から約10~20cm せり出している。

以上の事から左側壁では玄室部分および袖部と、4番目の腰石以降の大まかに3区分され構築されたものと考えられる。

また墓道中央付近では、掘方塙底面の低い段の下端が墓道下端に連続しているため両側壁とも開口部にかけて石材底面が高くなってしまい、塙底との間に黒色土層が介在している事から考えて、掘方掘削後、開口部にあたる部分に黒色土層を埋め込み、その面を黄門部分の構築面としたものと考えられる。

石室床面は奥壁際と墓道開始付近で約10cmの比高差をもつが、ほぼ平坦である。全体に擾乱をうけているが玄室中央の天井石崩落石直下から検出された数石の状態から、塙底面上に敷石を行い格床としたものと考えられ、排水溝等の施設はもたない。

敷石は厚さ10cm前後の扁平な板状砾を用い、玄室中央部と墓道部境付近で検出し、玄室敷石部分からは須恵器杯細片及び鉄錠、ガラス小玉などが出土した。墓道部では塙が床面まで及んでいない事から、敷石も本来玄室に限っていたものと思われる。

墓道は墓道部ほぼ中央付近から石室開口方向にかけて検出した。南側上面を撓乱されているが、現状では全長約5m、上面幅は推定1m前後と思われ、主軸方位は石室開口部付近で、石室主軸線から9°北にずれ、SK5の北辺をかすめて緩くカーブし、先端部にかけ斜面の傾斜に

伴い像々に不鮮明となる。内部には上層に黒褐色土層が、下層に黃色土層が充満し、下半はしまっている。掘込みは検出面から平均約60°～70°の角度で直線的に掘込まれているが、石室側方と接するあたりからSK5付近にかけては二段掘りとなり、二段目の掘込みはほぼ垂直となっている。溝底面は幅30～40cmを測り、ほぼ平坦で墓道部と先端部では約36cmの比高差をもつ。先端部付近の上層下半から切子玉(11)が出土している。

3 石室前面 (第7図、図版2a)

石室前面の遺物は搅乱部分(墓道横の溝およびその先端部と墳頂部出土の玉)を除けば、古墳外表面の墳裾の石室開口部横と墳丘北斜面の2ヶ所から出土した。

前者は石室開口部横の墳裾部付近で4×2mの範囲から、主として大甕を中心とした須恵器と若干の土師器片が出土した。その状況は、ほぼ墳端ライン付近に前後するかたちで分布しており、その一部は南端付近で墓道上面にまで及んでいるが墓道内への傾斜は示さず、墓道埋没後の墳裾部からの二次堆積と考えられる。

出土した須恵器は大甕2～3個体分(第8図9)の破片が大半で、土師器(8)の破片と須恵器杯身・杯細片が若干含まれていた。また大甕(9)は、底部を欠き、全体の破損の状況から現地で破碎された可能性がきわめて高いものと思われる。

4 出土遺物 (第8図、図版9a)

本古墳に伴う遺物は、固化し得たもので須恵器杯蓋2、杯身3、高杯2、大甕、土師器甕1、切子玉2、ガラス小玉1、鉄鎌1があげられる。このうち墳裾部及び墓道内と玄室敷石部分出土のもの以外は全て石室前部の搅乱部分からの出土であるが、敷石部分出土の細片と接合するものがある事から、その多くは盜掘に伴い石室外に挿出されたものと思われる。

須恵器 (第8図1～7、9、10)

杯蓋は4個体分出土した。天井部は平坦面を呈し、体部と口縁部の境は不明確で、口縁部はほぼ垂直する。

杯身は5個体分出土した。いづれも小片であるがたちあがり部分から3つのタイプに分れる。

高杯は2個体分が出土した。杯部器壁は薄く、たちあがりはやや内傾気味で直線的に長く立上がる。脚部は短脚で透けなく広く外反する脚端部は逆三角形を呈し、端部を丸く終える。

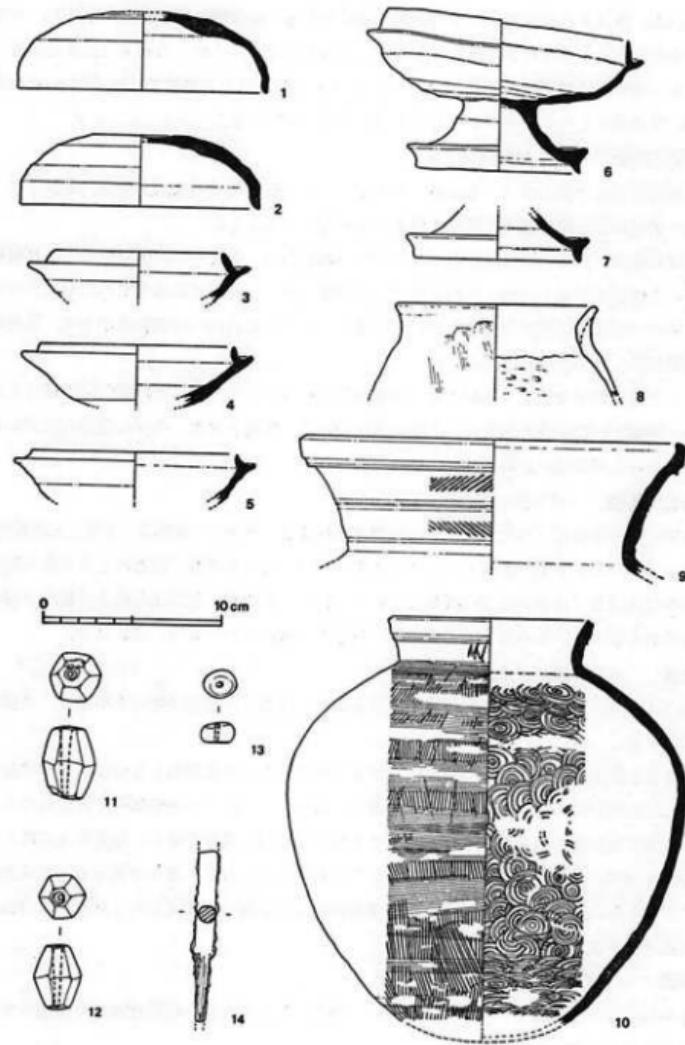
大甕は体部叩き等によって3個体分に分けられる。ともに口径、器高は異なる。9は沈線によって区切られた口頭部外面にへの字状の櫛齒状刻突文を施す。10は短かく外反する口頭部外面に篦描き記号文をもつ。

土師器 (第8図8)

石室開口部横の墳裾部から甕が出土した。口縁部は緩く外反し、内面は横位の篦削りで、外面には縱位のやや荒い刷毛目を残す。

玉類 (第8図11～13)

切子玉2、小玉1がある。前者は水晶製で、表面は良く研磨され質もはっきりとしている。



第8図 横ヶ崎第2号古墳出土遺物実測図 (1 : 3)

穿孔は一方向で内面に回転痕をとどめる。小玉は淡青色を呈するガラス製で内部に穿孔方向と同一方向に筋状の気泡がみられる。このことからガラス管を輪切りにして切り口周辺を研磨、穿孔したものと考えられる。

鉄鎌 (第10図14)

玄室敷石残存部より1点出土した。茎部のみで身部の形状は不明である。断面形は円形を呈し、下半に絞り方向の木質が付着しており、かえりをもつ。

第1表 横ヶ崎第2号古墳出土遺物概要表

環底器 (第8図)

(単位: cm, g)

No.	器種	接量	形態の特徴	技法の特徴	備考
1	杯蓋	口径 (13.6) 器高 (4.4)	天井部はやや低く、平底に近い。口縁部との接は不明瞭で緩やかに移行。口縁部は直立気味で端部をよくおさめる。	マキ上げ、水ヒキ成形による。天井部及び口縁部の約1/4程度まで回転ヘラ削り。中央部に一定方向のナデを施す。内面には一定方向の仕上げナデ。ロタリ回転右方向。	胎土: 石英、長石細粒を多く含みザック。 焼成: ややあまい。 色調: 灰~暗灰褐色 前底部擾乱部出土
2	杯蓋	口径 (13.4) 器高 (4.0)	天井部は低く、僅かにくぼむ。口縁部は不明瞭ながら競線により彎曲され、直立気味となり端部内面は外反し端部に至る。全体に器厚は厚い。	マキ上げ、水ヒキ成形による。天井部から約1/4を片方向への直線的なヘラ削りを施し、中央部は押圧により僅かに彎曲。内面には一定方向の仕上げナデを施す。ロタリの回転右方向。	胎土: 1mm前後の砂粒を多く含む。 焼成: 良好 色調: 青灰色 石室内底面出土
3	杯身	口径 (9.7)	立ち上りはやや直線的に内傾し立上り、受部は斜め外方にび端部は僅かに肥厚をよくおさめる。	マキ上げ、水ヒキ成形。立ち上りはオリコミ技法をとる。ロタリの回転右方向。	胎土: 微細砂粒を多く含む。 焼成: 良好 色調: 灰色 前底部擾乱部出土
4	杯身	口径 (11) 器高 (3.8)	立ち上りは内傾し端部付近で直立気味となる。受部は直線的に斜め外方にび、端部をよくおさめる。底部はゆるいカーブをもつ。	マキ上げ、水ヒキ成形。立ち上りはオリコミ技法による。底部は約1/4をヘラ削りのもの、不定方向のナデか。ロタリ回転右方向。	胎土: 微細な石英・長石粒を含む。 焼成: 良好 色調: 青灰色 前底部擾乱部出土

No.	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土、焼成、色調、備考
5	杯身	口径 (11.4)	立ち上りは新面三角形を呈し内上方にのび端部は直立し尖り氣味となる。受部は短かく突出し丸くおさめる。たちありとの間に沈線が廻る。	マキ上げ、水ヒヤ成形。立ち上りはオリコミ技法か。ロクロの回転左方向。	胎土：長石、石英の微細粒が多いがきめ細か。焼成：良好。色調：灰色。備考：小片。石室床面出土。
6	高杯	口径 (13.3) 高さ (9) 脚径 9	杯底部はやや平坦に近く体部との境は範線で廻し、体部は緩くカーブする。たちあるいは斜め方向に直線的にび端部は丸くおさめ、受部は斜め外方にのび端部を丸くおさめる。脚部は大きくラバ状に広がり折り返して逆三角形を呈し、外反して端部に至り丸くおさめる。	マキ上げ、水ヒヤ成形による。杯底部は外面底体部を引継ぎ前り、内面中央は不定方向の仕上げナデを施す。立ち上りはオリコミ技法による。脚部は杯底形成後に接合し脚部内面はヘラ削り後内外ともロコナデ。ロクロの回転左方向。	胎土：石英・長石等粗粒若干含むがきめ細かい。焼成：良好。色調：灰色。脚部にひずみがある。
7	高杯	脚径 (9.2)	広く外反する脚部は端部下方にくの字状に折り返し、上下に抜壓し下端部を丸くおさめる。	マキ上げ、水ヒヤ成形・脚部下方はオリコミによるものか。	胎土：石英・長石等粗粒若干含む。焼成：良好。色調：淡褐色～灰色。前底部沈孔部出土。小片。
8	土師器 甕	口径 (約11)	ゆるく外反する單純口縁で、肩部にかすかにゆるい段をもち脚部へ移行。	内面は肩部付近まで右方向への横ヘラ削り、外面は左方向のやや荒い頭毛調整で口縁部内外面は横ナデ（外面口縁部上方に接合部）。	胎土：2～5mm内外の砂粒をやや多く含む。焼成：ややあまい。色調：褐褐色。石室開口部側方上面出土。
9	甕	口径 (30)	口縁部はくの字状に外反、下半に一本、中程に2本の沈線に区切り、その間にタシ歯状工具による斜方向の刺突文を施す。口縁部は、若干内傾気味に立ち上り、下方に沈線を1本めぐらせ、端部は平坦面をもち上端を丸くおさめる。	脚部内面は同心円状タタキ、外面は平行印き。	胎土：1mm前後の石英粗粒を若干含む。焼成：堅硬。色調：褐色～灰色。石室入口横幅散布地。

No.	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土、焼成、色調、備考
10	甕	口径(22) 胴最大径(45) 器高(約47)	口頸部は胴部から垂直気味に立上り、口縁部付近で外反氣味に折り返し、その下方と口端部にそれぞれ沈線を廻りす。体部は倒卵形を呈し最大径をやや上位にもつ。	胴部内面は同心円状叩き目の後、上半に部分的にナデ。外面は平行叩きの目と上に回転カキ目調整。部分的にナデ。頭部に「W」字状ヘラ書き記号文をもつ。	

王類(第8図)

No.	遺物	材質	最大長	最大幅	重量	孔径		穿孔方向	備考
						上面	下面		
11	切子玉	水晶	2.4	1.7	8.05	0.4	0.2	一方向	墳頂表土出土
12	切子玉	水晶	2.15	1.6	5.4	0.35	0.15	一方向	墓道上層出土
13	小玉	ガラス (濃青色)	1.05	1.05	0.85	0.2	0.15	一方回	石室内床面出土

鉄器(第8図)

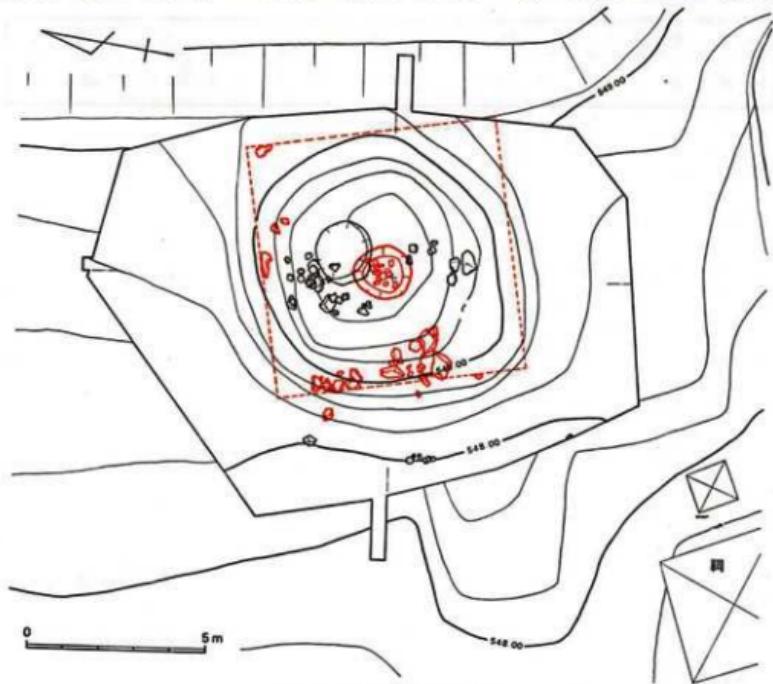
No.	遺物	最大長	径	重量	備考
14	鉄鍼	5.6	0.6~0.35	5.4	下半に縱方向木質部付着。石室内床面出土。

V 横ヶ崎古墓

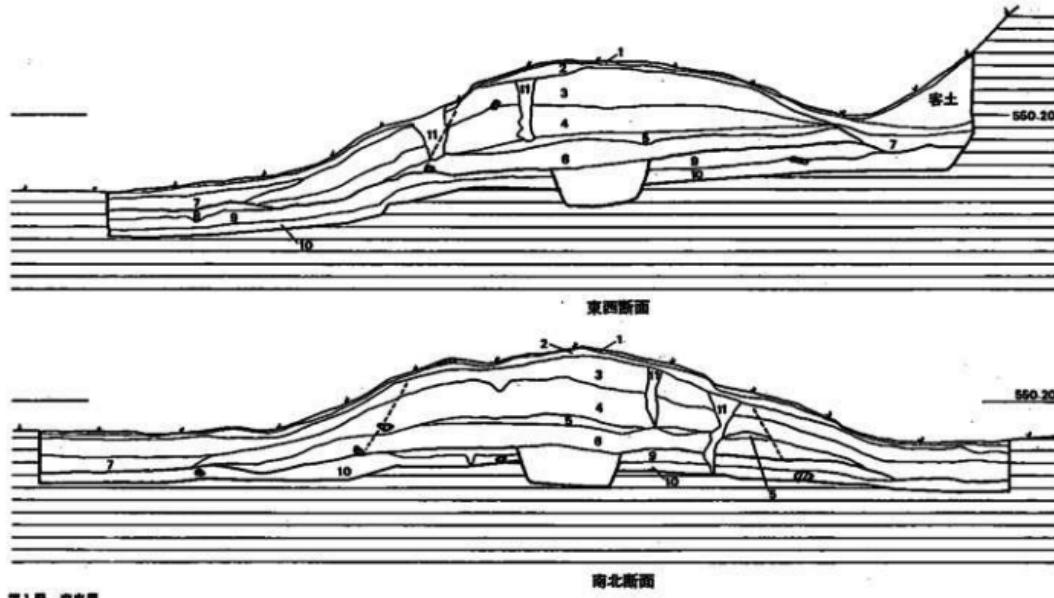
1) 墳丘 (第9、12図)

本墳墓周辺の基本的層序は、表土層、黒色土層、暗茶褐色土層、黒色土層、黒褐色土層となり、更に下部には漸移層をへて黄褐色土層が観察された。墳丘築造面は旧表土もしくは削平面にあたると考えられる黒色土層(第8、9層)上面に求められる。しかし、盛土は層厚が平均20~60cmと厚く、色調、しまり等も、ほとんど類似した黒色系土層から成っていたため、東西土層断面東半部ではっきりした墳丘ラインを検出したほかでは、盛土と墳丘外方の自然層との区別が出来ない状態で、盛土出土物の識別も困難であった。

これらの事から、まず黒色土層面を墳丘築造面として、中央部にこの墓塚を設け、主に西辺のみに限定して列石を配置し、墳丘周辺の黒色土層を盛土として墳丘を築いたものと思われ、畠地境の段として用地外にのびる緩やかな高まりも、何らかの意図で掘削をまぬがれた観を呈



第9図 横ヶ崎古墓墳丘実測図



- 第1層 表皮層
 第2層 沢土層
 第3層 黒色土層、しまりは悪い。
 第4層 噴灰褐色土層、バイラン粒(砂粒)を若干含む。 } 盛土
 第5層 黒色土層
 第6層 噴灰褐色土層、4層に比べバイラン粒少ない。
 第7層 黒色土層、しまりは悪い。
 第8層 噴灰褐色土層、バイラン粒を多く含み、しまりは良い。
 第9層 黒褐色土層、バイラン砂粒を含み、しまりは良い。
 第10層 黑褐色土層、9層に比べバイラン砂粒を多く含み、硬くしまる。

第11層 挖削による擾乱層

第10図 横ヶ崎古墳断面図



している。

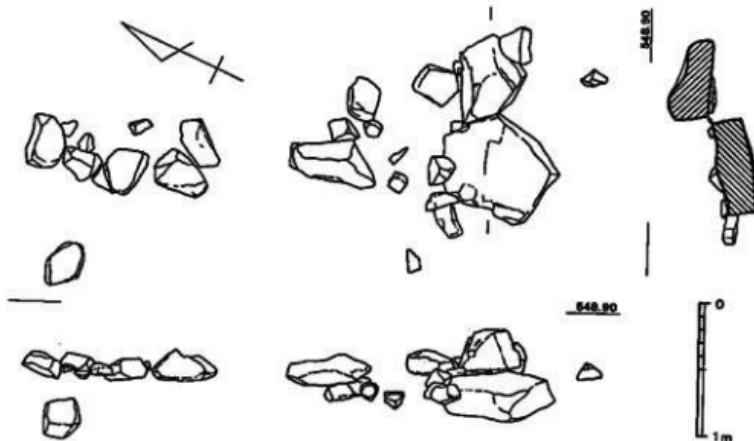
また南北土層断面南半部では不明瞭であるが、その北半および東西断面の状態から墳丘築造にあたって墳端の整形を行った事が窺われる。つまり東西断面東半の墳端外方では黒褐色土層が途切れ、墳端で黒褐色土層上面にわずかな窪みがみられる。更に東西断面西半部では、墳丘推定ライン外方で、第6層が途切れ、各肩とも傾斜を増している。ここでも西方にのびる茶褐色土層と墳端との間は平坦面に近い状態を示している。

列石（第11図、図版8a）は西辺のやや北西コーナー寄りで、長さ約4mにわたり検出された。主に小兒頭大～人頭大の亜円礫を用い、9層上面に概ね砾小口または横口を墳丘外に向けて面を描える様にして並べている。この南端部では1m近い板状角礫が用いられているが、北側に延びる列石のそれとは状況を異にしている。他辺の推定ライン上にも礫が点在するが、石列の崩落を示す礫はほとんど検出されなかった事から、本来この列石は西辺墳端のみに構築された可能性が高い。

以上、墳端部整形痕跡および列石から墳域を推定すれば、基底面で一辺7mのほぼ正方形を呈し、墳端部から五輪塔散乱面まで比高差1.6mを測り、西辺の状況から、南北方向の中軸線をN20°Wにもつ。墳丘の上面プランは現状では、墳丘の推定ライン及び五輪塔の遺存状態から、一辺5～5.3mと推測される。

2) 墳頂部施設 (図版7b)

墳頂部は盛土の流出と盜掘場などにより、かなり旧状を失っていたが、その南側と北西部斜面寄りで砾、五輪石等の散乱部分を検出した。



第11図 横ヶ峰古墓列石実測図 (1:40)

北半部は墳丘上面の北辺推定ラインに接して、 $2.8m \times 1.5m$ の範囲から五輪塔 3 基分と板状亜角礫などを検出した。多くは墳丘の流出に伴って原位置を失っているが、地輪は板状亜角礫上からはずれた様な状態で出土しており、五輪塔は本来これらの板状の礫上に据えてあったものと考えられる。

南半部は、墳頂部基点付近から南辺の上面推定ラインにかけて、 $2 \times 2.2m$ の範囲から五輪塔（1基分）、板状亜角礫が出土した。板状礫はいずれも上面を水平に近い状態で、30cm 程の段差をもって置かれ、墳丘上面推定ラインに近接しており、本来その境付近を画していた可能性が考えられるが、流出土内と墳丘下への転落石は僅かであり、部分的なものと考えられる。

宝鏡印塔台座は、さきの上面推定ライン寄りの板状礫の高位にあたる礫の上に据えた様な状態で、墳丘上に露出しており、その上に塔身と五輪塔火輪（第14図3）が置かれていた。しかし礫と台座の間には若干の表土層が介在していたため、これが本来の原位置を保ったものかどうかは断定しかねる状態であった。

また、西辺の墳端部より約 2m 外方の、墳丘出土内から人頭大～隼大の礫と共に五輪塔の空・風輪 2 点が出土した。いずれも墳端の埋没後の転落である。このことから、墳頂部には少なくとも 5 基の五輪塔があったものと考えられる。

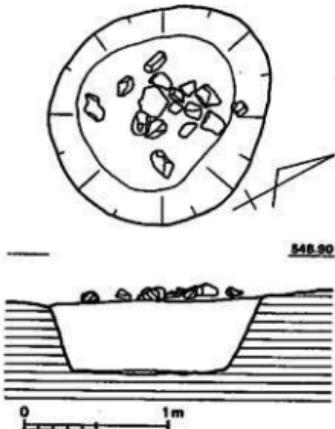
3) 埋葬施設（第12図、図版 8 a, b）

内部主体としての埋葬施設は、基底面中央部のやや東辺寄りで、土塙墓 1 基を検出した。基壇は黒色土上面から掘込まれたもので、平面形態は正円に近い橢円を呈し長径 1.63m、短径

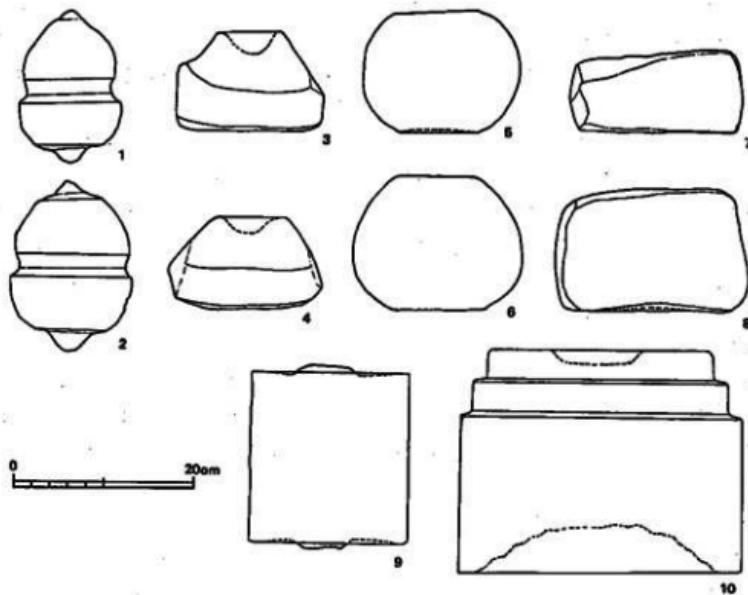
1.56m を測り、主軸方位は N20°W を指している。土塙上面には、隼大の亜角礫 16 個が分布していた。これらの礫はほとんど重なり合うことなく、その下面是、礫群のはば中央部で僅かに密むものの、土塙の上端縁を結んだ面と一致している。また塙内にはややしまりの悪い黒色土層が埋込まれていた。深さは掘込み面から 50 cm を測り、65°～75° の角度で直線的に掘込まれており、土塙下端で明瞭な屈曲を示す。そのため塙底面はほぼ平坦となっており、長径 1.13 m、短径 1.00m を測る。尚、塙内底面からは副葬品等は検出されなかった。

4) 出土遺物（第13図、図版 9 b）

墳丘築造時の混入遺物を除けば、本塙墓に直接伴う遺物は五輪塔と宝鏡印塔のみである。



第12図 横ヶ崎古墓主体部実測図
(1 : 40)



第13図 鳩ヶ峰古墓出土五輪塔・宝鏡印塔実測図（1：6）

五輪塔（第13図1～8）

いずれも石灰岩系の石材を使用しており、風化、損傷が著しい。その内訳は空・風輪5、火輪5、水輪4、地輪3（破片2）の計5基分である。

空・風輪は高さに対し、幅（径）の異なるもの。火輪は屋根端部に緩くそりをもつものともたないもの。水輪では高さに対し最大幅（径）を中位にもつものと、やや下位にあるもの。さらに地輪では高さの高いものとやや低いものなど若干の変化は示すものの、全体的にみれば5基ともほぼ類似した形態を示すものである。

宝鏡印塔（第13図9、10）

台座、塔身各1基づつあり、共に大理石系の石材を使用している。台座は上面中央部に浅い窪みをもち、下面を荒くドーム状に削っている。塔身はほぼ立方形で、上下両面に低い円形の突出をもつ。共に無地で、蓮弁、梵字等はみられない。

これらの出土遺物から、本古墓の形成時期は概ね室町時代頃に考えられよう。

第2表 横ヶ崎古墓出土五輪塔・宝鏡印塔計測表 (単位はcm)

No.	種類	最大高	最大幅	出土地点・備考
1	五輪塔 空・風輪	17.2	11.5	墳頂部北西部散乱面出土
2	〃 空・風輪	18.9	13.6	墳頂部南半部散乱面出土
3	〃 火輪	11.3	16.5	宝鏡印塔塔身上に設置
4	〃 火輪	10.2	17.1	墳頂部北西部散乱面出土
5	〃 水輪	13.7	17.4	同上
6	〃 水輪	15.1	18.9	同上
7	〃 地輪	9.3	19.3	同上
8	〃 地輪	13.5	21.7	同上
9	宝鏡印塔 塔身	20.5	17.9	台座上に設置
10	〃 台座	24.7	31.7	墳頂南側外表に設置

Ⅱ その他の遺構と遺物

第2号古墳周辺および背後の尾根にかけて4基と、第2号古墳墓道わきで1基の、計5基の土塙を検出した。いずれも出土遺物はなく古墳との直接の関係は不明であるが、SK3、4は壁面が加熱により赤変し焼土面となっていた（第14図）。

SK1

第2号古墳の北西側周溝に接近しており、上面径90cm、深さ20cm、底径75~64cmの円形を呈し底面は中央部にかけて緩い凹みを示す。覆土は3層に分層されるがいずれも炭化物粒を多量に含む。

SK2

第2号古墳の背後にのびる尾根平坦面にあり、上面径約110cm、深さ約20cm程度の円形を呈し断面は皿状となる。覆土はSK1同様多量の炭化物粒を主体としたしまりの悪い土層から成る。また本土塙周辺の表土層中より繩文土器小片が出土したが、これらの遺構との関係は不明である。

SK3

第2号古墳周溝と接し、これに伴う丘陵カット面にあり、周溝の土層断面では、その造成に伴って西半を削平されており、第2号墳築造以前の所産である。現状では、上面径約1m前後、深さ約30cm、底径約80cmの円形を呈し、底面は一方に緩い傾斜をもつほぼ平坦で、数個の撲跡が出土した。壁面は赤変しており、覆土は焼土粒を多く含む暗褐色系の土層で、他の土塙と比べ、炭化物粒の量が少ない。

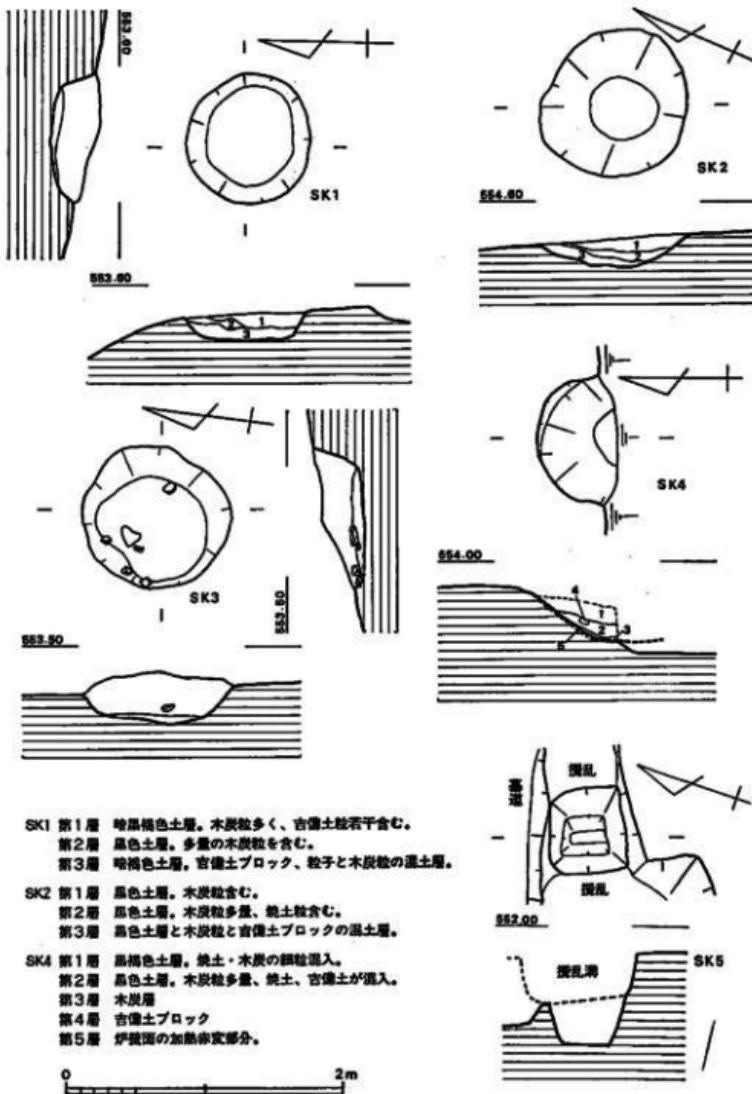
SK4

SK3を切る丘陵カット面に近接した崖面にあり南半は失われていた。現状で、推定上面径約90cm、深さ約30cmの円形を呈するものと思われる。SK3同様壁面は加熱により赤変し、炭化物粒を主体とした覆土が充満していた。

SK5

石室から西に延びる墓道の東側で撲乱塙に接して検出した。本土塙の直上から石室にかけて塙壠に伴うものと考えられる溝状の撲乱部分があるため、墓道との新旧関係については不明である。塙内には吉備土、黄褐色土ブロックが混入して硬くしまりの良い黄茶褐色系土層が充満している。上面プランは57×60cm方形を呈し、掘込みの角度は撲乱面からでは約70°を保ち、深さは30~36cmを測る。塙底面は三辺の下端で緩い段をもつため、長軸で25cm、短軸10cmを計り、主軸方位はN20°Wを指している。出土遺物はない。

以上5基の土塙はいずれも出土遺物を欠き、SK3以外は古墳との新旧関係は不明である。これらは、SK1~4が壁面に加熱痕跡をもつもの（SK3、4）と、そうでないもの



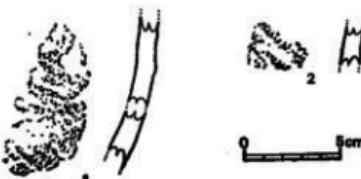
第14図 土 塚 実 測 図 (1 : 40)

(SK 1, 2) に分かれ、SK 5 は形態、裏土等でこれらとは異なる。古墳築造に先行する SK 3 については、縄文土器片の存在と何らかの関係も考えられるものの、他の 4 基については、その性格等について判断する材料を欠く。

5) 出土遺物 (第16図、図版 9 a)

古墳に伴わない遺物として本墳カット面背後に延びる丘陵平坦部分の表土～漸移層上面から縄文土器 3 片が出土した。うち 2 片は接合し、他の 1 片も同一個体と思われる。

淡明褐色～淡暗褐色を呈し、1 mm 前後の砂粒を含み植物纖維を混入する。内面は一方向の削りがみられ、外面には斜め方向にやや荒い縄文原体が施されている。纖維を混入している事から縄文時代早期末に比定されよう。



第15図 縄文土器 (1 : 3)

VII. まとめ

今回の調査では古墳、古墓各一基のはかに縄文時代の遺物などが出土した。

横ヶ崎第2号古墳は丘陵先端部に占地する径約10m、高さ約2mの規模の円墳で、その造成にあたっては地形を利用し、地山の整形と盛土によって墳丘を形成しており、片袖式横穴式石室を有している。主軸は第1号古墳同様ほぼ東西にとり前面の谷に向って開口している。

石室は開墾のため、墳丘南半と共に半壊されていたが、全長5.20mのうち玄室長は3.13m、葬道長2.07mを測る。その平面プランは玄室で最大幅1.86m、最小幅1.36mと、左側壁の一方に偏して強い調張りを呈するもので、葬道では中央最狭部幅0.78m、開口部幅1.17mと、両側とも中央部で内済し開口部で開き気味となる状態を示している。

次いで石室の構築状況は、奥壁が2枚の板状石材を広口積みし両側壁と「匁」状に接合している。腰石は両側壁とも概ね広口積みし、腰石上への構築は右側壁では奥壁から偶数の腰石上を広口積みし、他の腰石上を横口積みとしている。しかし葬道中央の墓道開始部分にあたる最狭部では、若干の相違はあるものの両側壁ともその構築方法を変え継積みをとっている。その状態から右側壁は2つに、左側壁では3つに石室の構築を分けて組んだものと思われる。

天井部の構造は不明であるが、側壁最上段で礫を小口積みしており、この面が天井部架構面と思われ、高さも2m前後を保っている。また側壁上半は僅かに緩く持ち送り状を呈している。

埴底面は平坦で、その直上に敷石を施し床面としている。また葬道中央付近から、開口方向に約5mにわたり墓道が掘込まれている。その先端から切子玉が出土しており、杯類にみられる若干の差から、追葬の存在を示唆するものと考えられる。

出土遺物は、石室開口部横の墳裾で出土した大甕の他に杯蓋、杯身、高杯などの須恵器と土師器甕、切子玉、ガラス小玉、鉄鏃などがあげられる。概ね6世紀後半頃のものと考えられるが杯蓋、高杯と杯身とで若干の時期幅が考えられよう。

本古墳と類似する片袖式横穴式石室をもつ同町大塚第1号古墳と比べると、大塚第1号古墳では玄室長と幅が近似するのに対し本古墳では、石室最大幅に対してその全長を増している。

石室の構築も大塚第1号古墳では小口積みを中心としたもので本古墳とは相違をみせている。

墓道、玄室調張りの状態、開口部での積方など、類似する点もあるが、本古墳では全長ならびに玄室長が大きくなり、併せて玄室長と葬道長も変化し、6世紀中葉に位置づけられる大塚第1号古墳と、後半にあたる本古墳との、石室構造の変遷を示唆するものであろうか。

本古墳群の形成についてみれば、第1号墳は推定径約10m、高さ約2mと第2号墳とほぼ同規模の墳丘をもち、立地及び石室開口方向を同じくする無袖式の横穴式石室で、鉄刀、須恵器、土師器などが出土しており、第2号古墳同様6世紀後半と考えられる。両古墳とも追葬などに

よる時期幅を明確にし得ないものの、6世紀後半に相前後して形成されたものといえる。

中核的といえる古墳群の集中地区を除けば、町内のそれは前述の様に、各地区毎に散発的に小規模な古墳群を形成している。本古墳群の状況もそれに反するものではなく、中小の河川流域において、その農業生産力を基に台頭して行く同族集団の有力家長層及びその血縁集団を想起させよう。しかし、高梁川水系にあって、既に弥生時代後期には、吉備と軒を同じくする墓制を示す特定の集団墓を形成しており、製鉄の問題も含めて、その政治的背景も複雑な感をうけよう。

古墳祭祀の問題としては墳頂部出土の甕と木炭の充満した土塙があげられる。共に類例は多く、前者では意図的な破砕を行っている。後者では月貞寺第28号古墳¹⁹の様に古墳の四隅に焚火跡を配したものも知られるが、本古墳の場合、同時期と断定する指標を欠き、不明である。

横ヶ峰古墓は山麓裾の緩斜面に作られた一辺7m、高さ1.6mの方形墳墓で、墳頂の一辺に列石をもつて他は全て盛土による構築である。基底面の墓底から出土遺物はなく、墳頂部に配された五輪塔・宝鏡印塔から、ほぼ室町時代の所産と考えられる。盛土のみによる方形墳墓は三次市松ヶ迫G地点S X 1²⁰などがあげられるが、石材を多用したそれに比べ、その調査例は少なく、森地区においても方形マウンドのみのものの分布は明らかでない。

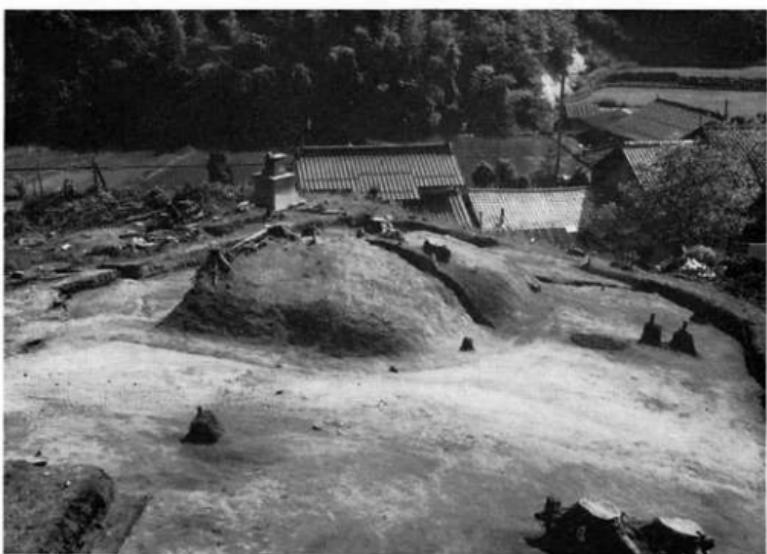
縄文時代のものでは、織錦混入土器片があげられる。この土器群は、帝釈族遺跡群などの調査成果により、前期羽島下層式に先行する土器群として、縄文時代早期末に比定されており、山陰～中国山地一帯に分布をもつものとして注目されている。²¹

以上、各遺構、遺物とも森地区においては初めての調査のため、同辺地域での対比等に御約を受けており、これらの出現する社会的、政治的背景については今後の資料の蓄積をまって、あらためて検討する必要があろう。

- 註 (1) 大坂古墳群発掘調査団『大坂古墳群発掘調査報告書—広島県比婆郡東城町所在一』1980年。
- (2) 広島県教育委員会「牛川遺跡」『中国縱貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2)1979年。
- (3) 広島県教育委員会「月貞寺古墳群」『中国縱貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 1978年。
- (4) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化調査センター『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告—三次工業団地建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査一』1981年。
- (5) 河瀬正利「中国山地の縄文文化—帝釈族遺跡群を中心として—」『松江考古』第3号、松江考古学講話会、1980年、その他。



a 梶ヶ岬第2号古墳調査前近景（西から）



b 梶ヶ岬第2号古墳墳丘検出状況（北東から）

図版 2



a 第2号古墳墳窓部遺物出土状況



b 第2古墳墳丘断面（南北土層断面）



a 第2号古墳石室検出状況（南から）



b 同上 第2号古墳玄室敷石残存状況

図版 4



a 第2号古墳石室残存状況（奥壁側より）



b 同 上 (正面より)

図版 5



a 第2号古墳完掘状況（西南より）



b 同 上（北東より）



SK 1



SK 3



SK 4



a 樅ヶ岬古墓調査前近景（南から）



b 樅ヶ岬古墓墳頂部北西側五輪塔検出状況

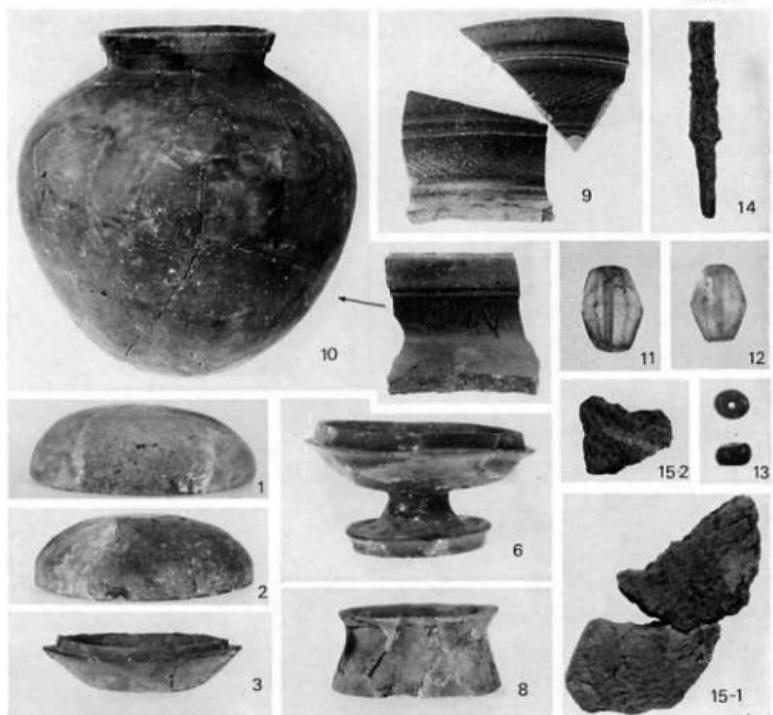


a 横ヶ崎古墓基底部遺構検出状況（北から）

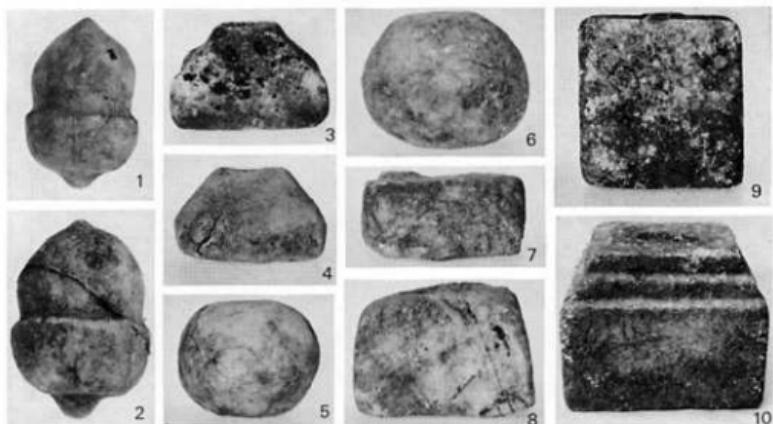


b 横ヶ崎古墓主体部完掘状況

図版 9



a 横ヶ岬第2号古墳出土遺物



b 横ヶ岬古墓出土遺物

横ヶ崎第2号古墳発掘調査報告

—国道314号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査—

昭和58（1983）年3月

編集・発行 広島県教育委員会
(財)広島県埋蔵文化財調査センター

印 刷 中 本 総 合 印 刷 株 式 会 社